The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大阪大学低温センター50周年記念誌に寄せて
Author(s)	百瀬, 英毅
Citation	大阪大学低温センター 50周年記念誌. 2025, p. 74-75
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102130
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学低温センター50周年記念誌に寄せて

大阪大学安全衛生管理部
（兼）大阪大学コアファシリティ機構　低温科学支援部門（旧低温センター）吹田分室
百瀬　英毅
低温センター　吹田分室助教：1993年4月～2015年3月

このたびは大阪大学低温センターが発足して50周年という記念すべき節目を諸先生方、諸先輩方、関係の皆様方と一緒に迎えることができましことに、まずはお慶びを申し上げます。また、大阪大学低温センターは非常に多くの皆様の支援を受けながら運営が続けられてきておりますので、ご支援を賜りました皆様に深く感謝を申し上げたいと思います。

発足から約50年間、運営の形態をほぼ変えることなく、大学での教育・研究・診療などの諸活動を縁の下から支える存在として、地道に業務を続けてきたことは、なかなか表立って評価される機会が少ないですが大学において非常に重要な事であり、大学の基礎や土台の一部として重要な任務を担ってきたことは強く誇りに感じて良いことだと思っております。大阪大学における液体ヘリウムや液体窒素などを用いた低温に関わる諸活動に対して、これらの寒剤が滞りなく供給され続け、それぞれの諸活動が円滑に進められて、社会から期待される大阪大学としてパフォーマンスが長きにわたって保ち続けられていることは、このセンターに携わった者として感慨深いものがあります。

さて、ご承知の通り、低温センターは2024（令和5）年３月末日をもってセンターとしての歴史を閉じ、コアファシリティ機構低温科学支援部門として改組されて、新しい歴史を歩み始めました。従来の低温センターは利用者が中心となって運用をする点をとても重要視した組織でした。センターの建屋と液化装置などは文部省からの予算措置がありましたが、人員については当初は助手１名のみであり、液化装置の運転などは低温センターを利用する各部局（理学部、工学部、基礎工学部）に所属する技官が担う形でした。これらの人員の先頭に立つ低温センター長・副センター長はセンターを利用する２大部局である理学部と工学部の教授が２年ごと交代で担当しており、その後に学内に発足する研究センターのようにセンター専属の教授は配置されず、利用者からの視点を重要視する運営体制がとられました。文部省から運営費（当時は国立学校特別会計から予算配分されていた校費）が支給されていましたが、センターとしての基盤的な事務業務などを遂行する程度の予算に限られ、当初よりセンターを利用する研究室などから支払われた利用負担金を予算原資として運営が続けられてきました。

今回、コアファシリティ機構となり、そのトップである機構長は本学の理事・副学長が担当しておられます。大学全体を見た教育・研究・診療・社会貢献などの諸活動の中で、大学執行部による判断に沿った運営体制がとられる形に代わりました。これはパラダイムシフトとも言える大変革でもあります。ヘリウム液化装置や回収系統などの大規模設備を保有して運用する基盤業務を担っているため、数年で何かが大きく変わることはないと思われますが、時代の変革とともに一歩ずつ新しい時代に合う低温

センターとしての歩みを進めていただきたいと思っております。

このところ大学では資金獲得など予算面の話であったり、世間一般では人手不足による業務の担い手育成の問題などが話題となっています。寒剤を供給するセンターとしての研究等を取り巻く環境は相変わらず厳しいものがありますが、これまで通り、大学の基盤の一つを縁の下から支え続ける存在として在り続けて欲しいと思っております。

百瀬先生が設置に携わった吹田分室のヘリウム液化装置.